

第 20 回仙台ダルク記念フォーラム

(特活) 仙台ダルク・グループ仙台ダルク

〒980-0011 宮城県仙台市青葉区上杉 2-1-26

助成事業の概要

昨今、連続して取り上げられる芸能人の薬物事件もあり、以前と比較して薬物依存症ということばが一般の人々にも知られるようになってきました。私たち仙台ダルクが開設された 20 年前の、薬物といえば反社会的組織や、社会の道はずれてしまった特定の人の問題という認識からは、状況は少しずつ変化してきています。

しかしながら、薬物問題は依然として当事者本人だけの問題とされることも多く、施設開設にあたっては地域住民からの猛反対をうけることも珍しくありません。このような状況のなか、今回の記念フォーラムは、仙台ダルクが開設からみてきたこの 20 年を振り返り、これまで体得してきた学びや反省をふまえながら、これからの依存症回復支援として必要なものは何なのか、どのようにあるべきなのかなど、当事者、家族、各専門家、行政の人々と共に学び、考える場にしたいという想いで開催致しました。

事業の成果

当日は 300 名を超える方々にお集まり頂き、祝辞では、行政機関から奥山仙台市長の代理として精神保健福祉センター所長の林みづ穂氏、村井宮城県知事の代理、宮城県精神保健福祉部長、渡辺達実氏、仙台保護観察所長の吉田千枝子氏にお越し頂きました。これらの行政機関の方々とは日ごろから連携を取らせて頂いているものの、実際、私たちが支援対象としている依存症がどのよ

うなものなのか、どのような支援を行っているかという具体のものを理解頂く機会はそれほど多くありません。今回はフォーラム開会から閉会までご参加頂き、依存症者の生の声、活動の実際、施設運営の課題と苦勞など知って頂くことができたのではと思っております。

そのアンケート結果で印象的だったのは、仲間の体験談でした。今回は時間の都合により、1 名しか予定することができなかったのですが、たくさんの方々が「依存症のつらさが手に取るようにわかり感動した」などと書いてくださいました。太鼓演舞も同様ですが、薬物を乱用している最中の、荒れ果てた生活と身体、親・親族や友人・知人に多大な迷惑をかけていた頃からは想像もできない姿をご覧いただくことで、薬物依存からの回復のありようをお示しできたのではないかと思います。しかし、ここまで回復してきたとしても、またいつなん時、再乱用に走ってしまうのか計り知れないところです。そのようなことも含め、薬物依存症という病気と、依存症に苦しむ当事者とを別に考えて頂けるきっかけにもなったのではないかと思います。

全国のダルク施設長によるシンポジウムでは、ダルクの抱える課題とこれからの展望を話して頂きましたが、ダルクが存在するということが、わが国に薬物依存症者が存在するという他に他なりません。依存症は当事者個人の問題と終わらせるのではなく、貧困や障がい者問題、福祉制度と支援の在り方など、社会一般の問題も包含して考えなければなりません。今回は教育、医療、福祉などの専門職の方々、また関心のある一般の方々

にも向けて、この点で問題提起ができたのではないかと考えております。

■ 成果の広報、公表

当日までの成果と、仙台・宮城の地における薬物のみならずアルコールやギャンブルのアクションをとりまく課題については、当日ご来場の皆さんにお配りさしあげた20周年記念誌でもご報告、ご提言させて頂いております。特に座談会で言及されている宮城モデルについては引き続きの検討項目であり、本座談会を原点としてさらに深化させていくべきものと考えております。

当日の状況は、仙台ダルク公式ホームページでご報告を行っておりますが、今後、仙台ダルクとして活動を行っていくなかで、仙台市や宮城県、精神保健福祉センター、宮城・山形、青森の各刑務所等の行政機関へお知らせさせて頂く所存です。

また宮城のみならず、当日シンポジストとして参加してくださっている、札幌、相模原、山梨、長崎、千葉、栃木、川崎、京都、それぞれのダルク施設長が、自身の活動地域のなかでも、今回の成果や課題をさらに深め、広めていってもらえるものと考えています。

■ 今後の展開

少しずつではありますが、わが国でも薬物依存症支援としては処罰ではなく治療が必要と、一般の方にも周知され始めたところです。刑務所に押し込むことだけで、薬物依存症が回復をみることはありません。アメリカ等のドラッグコートで見られるように、地域社会のなかでいかに回復に取り組むかということが、これからの薬物依存症支援になるかと考えます。しかしながら、地域で回復を図る方策や支援制度はまだまだ手探り状態

というのが実際のところではあります。

このような状況を踏まえ、これまで行ってきた学校・地域等での講演活動はもちろんですが、依存症に苦しむ仲間を一人でも救うべく、仙台ダルクでは全国のダルク、各行政機関、研究機関などとも連携を図りながら、依存症全般の支援について提言させて頂きたいと考えています。

最後になりましたが、今回多大なるご支援をいただきました、日本社会福祉弘済会の皆さまには厚く御礼申し上げます。引き続き、依存症支援にお力を貸して頂けますよう何卒よろしくお願い申し上げます。